書　評

James Ferguson,

Expectations of Modernity: Myths and Meanings of Urban Life on the Zambian Copperbelt.

Berkeley: University of California Press, 1999, xxvii＋326pp.

小倉充夫（おぐらみつお）

I

ザンビア北部に位置する銅の産出地帯（コパーベルト）は鉱山開発により，農村から多くの人々を鉱山労働者として引きつけてきた。コパーベルトにはいくつもの鉱山都市が生まれ，都市人口が急増していった。サハラ以南のアフリカでは南アフリカを除くと，例外的に都市化の進んだ社会となった。「部族社会」と捉えられた社会に住む人々が，都市に働きに来て住むようになる。こうして彼らは「部族民」から「都市民」となる。植民地支配の確立と植民地経済の展開によって，いやおうなくアフリカの社会が変容を迫られる中で，ザンビアは変化の最先端を行く事例となった。このことがアフリカ研究においてザンビアに特別の関心と意義を与えることになったのである。

本書は1940年代〜50年代ザンビアの鉱山労働者に関する社会人類学的研究の蓄積を踏まえつつ，80年代における鉱山労働者を取り上げ，その分析の上で，従来の研究に厳しい批判を加えている。評者も1987年から農村・都市間を中心とした労働移動調査をザンビアで行ってきた。しかしコパーベルトについては鉱山都市ムフリラ（Mufulira）で１度調査を行ったのみであり，ほとんどは送り出し地域である東部州農村を調査してきた。対象地域は異なるが，強い関心を持って本書を読んだ。著者の研究領域は文化人類学であり，評者の文化人類学についての知識は不十分であるが，文化人類学的な研究に対する違和感というものを本書にはほとんど感じなかった。むしろ歴史的な展開や，時代的背景を考慮しているという点で好感をもった。著者は単線的な発展論・近代化論に批判的であり，それらを相対化しようとする視点に共感するところが多かった。

II

本書の構成は以下のようになっている。

第１章　コパーベルトの理論的把握
第２章　永続性の期待
第３章　農村との結びつき，都市のスタイル
第４章　農村へ戻ろう
第５章　家庭生活の期待
第６章　アジアのミニアチュア
第７章　グローバルな切断

本書の内容を章ごとに順次紹介していくことにしたい。

「わが国は前進する，そして我々自身も」，「車を持つのは夢になってしまった。昔は良い仕事にありつけた若者はどんな車も買えたけれど，その時代は過ぎ去り，もう２度と戻ってこない」。第１章の冒頭にあるこの２つの文章は，1970年代を境とする２つの時代の違いを端的に示している。ザンビアはかつてアフリカにおいて産業的発展がみられる典型例と捉えられ，その発展はアフリカ版の産業革命と呼ばれていた。ところが1970年代後半以降ザンビア経済は後退の一途をたどり，コパーベルトの都市住民の生活は困窮化し，都市暴動さえ引き起こされることになった。古き良き時代を懐かしく思い返し，将来には後進性を予測せざるを得ない，すなわち近代化神話が崩壊したときどのようなことが鉱山労働者に生じたのかということが著者の関心である。

ローズ・リヴィングストン研究所（Rhodes-Livingstone Institute）を拠点に展開した鉱山都市労働者と労働移動の研究は，著者によると人種主義者である白人入植者や政府に対して批判的立場を示すもので

あった(注1)。研究所の人類学者たちも植民地支配自体を否定したわけではないが，アフリカ人は都市的文明に適応することができ，農村的・部族的なアフリカ人も近代社会のメンバーになることができると主張した。入植者と植民地政府は，都市のアフリカ人は一時的滞在者に過ぎず，「部族民」であることに変わりはないと考えようとした。そう考えれば，アフリカ人はいつまでも出稼ぎ労働者であって都市で脅威となる存在ではなく，都市でのアフリカ人の生活改善を行わない口実になったからである。この考えに対して，人類学者たちは都市労働者を農村に住む「部族民」と異なり，西欧化あるいは近代化された人々と捉えようとしたのである。

先行研究との関連で議論の中心になっているのは都市永住化をめぐってである。第2章において著者は都市永住化神話に対する批判を展開する。鉱山労働者の多くは従来は還流型であった，すなわち農村から鉱山都市に来て一定期間働いた後帰村した。しかし，やがて都市に次第に永住するように変化していくと言われてきた。これに対して著者は，ムーア（Henrietta L.Moore）たちの研究に依拠しながら次のように主張する。第2次世界大戦以前においても，人々は決してひとつのパターンに当てはまる存在ではなく，短期滞在者も確かにいたが，故郷を時々訪ねる既婚の長期滞在者もおり，農村と都市との間を行き来する出稼ぎ還流型の労働システムによってすべてを特徴づけてしまうことはできないという。

従来の説，すなわち著者のいう近代化神話によれば，第2次世界大戦後，とりわけ1964年の独立前後からは，還流型から永住型へ変化していくはずであった。アフリカ人にとっての都市居住条件が改善され，移動禁止の廃止という制度上の変化が生じたからである。しかし，著者は今度は逆に永住化の進展という主張に対して批判を加える。著者による1985年の調査結果に基づくと，都市永住化は認められないという。退職ないし解雇直前の鉱山労働者50名のうち47名は帰村の予定であった。翌1986年に行われた帰村者21名の追跡調査によると，全員が村に住み続けていた。すなわち鉱山労働者は退職後ほとんどが帰村していることになり会社もそれを推奨している。この点で過去との驚くべき共通性が指摘される。つまり著者は過去においても還流型ばかりでなく永住型も存在していたことを主張し，他方現在においても還流型が一般的であるといっているのである。

著者のこうした主張は変化をまったく無視しているわけではない。結果的には還流型ということで類似しているとしても，背景の相違を指摘することを怠っているわけではない。現在の農村への還流は，帰村を考えもしなかった人々が経済的苦境の中で帰村せざるを得なくなる，すなわち生存の必要によるというわけである。このような把握は評者自身の調査結果と相矛盾するわけではなく共通する部分も多い。しかし評者はさらに次のことを指摘しておきたい。鉱山労働者は会社から住居を提供され，従って退職後は当然そこを去らなければならない。このように鉱山に勤めている間は相対的に恵まれた生活を享受することが可能であるが，手工業者やインフォーマルセクターの従事者と異なり退職後の生活基盤を持っていない。このような鉱山労働者の特徴を考慮に入れなくてはならず，彼らから今日の都市労働者全体の動向を論ずるわけにはいかないであろう。

さらに指摘しておきたいことは第2次世界大戦以前から今日まで継続している特徴，すなわち多くの人々がいずれは帰村するということの意味をどう理解するかということである。著者は1980年代以降の帰村を経済危機と都市生活の困難さということで説明しているが，それではそれ以前についてはどう説明するのか。南部アフリカにおける資本主義の展開とそこにおける労働形態の特徴という構造的な理解がどうしても必要となるのではないだろうか。

第3章では興味深い文化人類学的な分析が行われている。長期にわたる都市滞在者の中にも，その態度や行動において「部族民」的である人々がいるということに注目している。このことを分析する概念としてローカリストという用語を使い，それと対照的な特徴をコスモポリタニストと名づけている。ここにおける議論の特徴は，特定の人がローカリストであるか，コスモポリタニストであるかというように捉えるのではなくて，1人の人間がローカリストでもありかつコスモポリタニストでもあると捉えてい

ることである。すなわち伝統的人間から近代的人間へという捉え方でないことはもちろん，移行の過程にある者，あるいは中間的段階の者として捉えるということでもない。ローカリストというのは農民そのものではなく，農村のスタイルそのものでもない。それはあくまで都市住民に見られるスタイルなのであるが，しかしそのスタイルは農村の生活と結びついている。退職後都市に住み続けることが困難な鉱山労働者にとって，村に帰ることができるか，村に帰って人々に受け入れられるかどうか，こうした関心や不安は大きなものがある。言葉使いや立ち居振る舞いが都市的になり過ぎていないかどうか充分に気をつけなければならない。そのためには帰村を念頭において日頃から注意をしておかなくてはならない。急に変えようとしても困難だからである。

第4章は今までの議論にそって個別の鉱山労働者についての事例を紹介している。いちいち紹介する紙幅の余裕はないが，諸事例からうかがわれる特徴を指摘しておくと，まず帰村とは必ずしも出生村や育った村，あるいは両親の住む村へ戻ることを意味しない。農村内部での移動が極めて頻繁であり，家族・親族は様々な村に住んでいるということが通常である。従って帰村するという場合，選択の対象となる村はひとつではなく複数である。土地取得にさほど問題があるわけではなく，家族・親族がどのように受け入れてくれるかということが重要である。立ち居振る舞いにより嫌われたり，夫の村に随伴した妻が災難に遭ったりしないかどうか，そうならないためにはどうすべきかということに心を砕かなくてはならない。電気や水道，さらには冷蔵庫や車の使用という都市的な文明を享受してきた人々にとって，農村での生活は大変厳しいものがある。しかしそれ以上に緊張を強いるのは社会的な適応の問題なのである。

この現実は鉱山労働者の家庭のあり方にも影響を及ぼしている。還流型から都市定住型へ変化するにつれ，家族も伝統的なものから近代的なものへ変化するという把握の仕方を，著者は第5章で批判している。まず都市の家庭では夫婦と子供以外の血縁の人々が同居しているのが通例である。再婚者の方が多く，男女の婚外の関係が極めて頻繁であるなど夫婦関係は極めて不安定である。このような都市家族の状況を，伝統的な家族構造が崩壊しつつあるが，新しい形態に置き換わっていない状況として捉えるという考え方がある。しかしこれは間違いであるという。

都市家族の現実は，様々な問題の解決や人々の生活戦略によって生み出されたのである。都市に住む成人女性は有業の男性に多くの場合依存せざるを得ず，そうした女性は妻とも，愛人とも，あるいは娼婦とも明確に区分できない男女関係の中で生活をしていると著者はいう。このような関係とその背景から都市住民の生活を捉える視点をミクロ政治経済学と称している。都市家族における夫婦関係は強固なものであるということを前提にする近代的核家族とは大いに異なる。女性にとっての利害からすれば，夫の村に行くことは多くの困難をともなうために，退職後の帰村をめぐって夫婦の関係が悪化し，離別に至ることもよくある。このような事態を都市家族がいまだ伝統的であるためと捉えるのではなく，まして社会病理的な現象であると捉えるべきでもない，というのが著者の主張である。

経済事情の悪化によって都市住民は退職後の帰村を考えざるを得なくなり，その分農村への依存度を強めることになる。その結果，都市住民がコスモポリタンでいることが困難になった。このことを第6章で述べている。コスモポリタン的特徴を強調し，永住化の傾向を指摘するという従来の都市研究は1950年代〜60年代の状況，すなわちあくまで経済の黄金時代の反映であったのである。最終章において，かつての黄金時代に対比して今日の状況を次のように捉えている。年配の鉱山労働者たちは，欠乏ではなくて喪失を経験し，外部世界とのつながりの欠如ではなく，切り離されたと感じている。従属論における“undeveloped,” “underdeveloped”になぞらえて，今日のザンビアはグローバル化の進展する世界において，“being unconnected”ではなく“being disconnected”であると表現している。著者の都市住民の生活と行動についての理解は，近代化論における移行の過程と結びつける理解とはまったく異なっている。このように特定の歴史的状況と変遷の中で対象の特

徴を捉えようとすることは基本的に間違ってはいない。より具体的には，光ファイバーや衛星通信の発達によって，ザンビアを文字通り世界につなげていた銅の役割が低下してきたのである。通信革命が世界を結びつけるかたわら，ほとんどの人が生涯電話というものを使用することがないザンビアを世界から切り離したのである。

III

本書の特徴は2点にまとめることができるであろう。第1は都市住民における永住化を指摘する研究に対して，退職後の帰村傾向の強さを強調していることである。第2は民族学や文化人類学においても考慮されるようになってきたと思われる，歴史的変遷や時代状況を踏まえて分析していることである。そしてこの2点は密接に関連し合っている。すなわち今日の厳しい経済状況の下だからこそ，都市での生活は益々困難になり，帰村の傾向を一層強めているというわけである。このことについては評者も異論がない。都市での雇用機会が厳しくなるにつれ，出稼ぎ労働は容易でなくなるとともに，1度就業することができれば，できるだけ長く都市に滞在するという傾向が強まることは自然である。しかし経済事情が悪化し，都市での生計維持が困難になれば，それだけ帰村は増え，また早められる。それゆえ1980年代における労働移動についてはまさにザンビア経済との関連を無視して捉えることはできない。

本書の弱点はまず第1に対象が鉱山労働者に限られているということである。都市住民の内でもインフォーマルセクターに従事している人々など，他の労働者について見れば帰村の傾向は鉱山労働者ほど強いものではない。第2の問題は1980年代～90年代の特徴を強調するあまり，そもそも植民地支配の下で開発が進められてきたザンビアにおける労働の特質，すなわち一貫した構造的特徴への留意が不十分であるということである。1940年代～50年代においてもすべての労働者が還流型であったわけではないが，今日の都市住民に永住化の可能性がきわめて高いわけでもない。すなわちザンビアにおける都市労働者，とりわけ鉱山労働に出稼ぎ還流型が多いということにおいてむしろ一貫している。こうした特徴の背景として，還流型労働形態が労働力再生産費の削減を可能にしたということを認識しておくことが必要である。農村で生まれ育ち，都市で働き，退職後老年期を農村で過ごす。このことは今に始まったことではなくて，むしろ植民地経済の開発当初から続いていることである。

こうした労働力に関する基本的な構造において，近年着目すべきはインフォーマルセクターの果たす役割であろう。退職後様々な理由によって，農村に帰ることができない人々は，インフォーマルセクターに従事しつつ，スクオッターの住民となった。1980年代～90年代において都市における生活が困難になるに従って，農村へ送金をしたり，農村をしばしば訪問するということはできなくなってきた。都市住民の側から農村との絆を維持することは容易ではなくなってきたのである。他方農村は相変わらず厳しい状況が続き，構造調整の影響や自然的条件によって翻弄され続けている。そうした中で，比較的恵まれた都市住民は地方中小都市の郊外に退職後住むという選択をするようになっている。しかし多くの人々はそうすることもできず，退職後スクオッターとして生活を続ける人も多い。一方にはザンビアにおける労働力とその再生産の構造，他方には1980年代～90年代の経済状況を見据え，前者の構造の中で労働者の行動と選択がどのように後者において具体化されているのかということを捉えていくべきであろう。

（注1）　グラックマン（M.Gluckman），エプスタイン（A.L.Epstein），ミッチェル（J.C.Mitchell），リチャーズ（A.I.Richards）などをさしている。先行研究については文献リストにあげたファーガソンの論文に詳しい説明がある。

文献リスト

Ashbaugh, Leslie Ann 1996. “The Great East Road: Gender, Generalization and Urban-to-Rural Migration in the Eastern Province of Zambia.”

Ph. D. dissertation, Northwestern University.

Ferguson, James 1990a. "Mobile Workers, Modernist Narratives: A Critique of the Historiography of Transition on the Zambian Copperbelt, Part I." *Journal of Southern African Studies*. Vol. 16. No. 3.

——— 1990b. "Mobile Workers, Modernist Narratives: A Critique of the Historiography of Transition on the Zambian Copperbelt, Part II." *Journal of Southern African Studies*. Vol. 16. No. 4.

Moore, Henrietta L. and Megan Vaughan 1994. *Cutting Down Trees: Gender, Nutrition and Agricultural Change in the Northern Province of Zambia, 1899-1990*. Portsmouth: Heinemann.

（津田塾大学学芸学部教授）